

第33回中国・四国地区公民館研究集会  
—平成22年度広島大会—（兼）第60回広島県公民館大会

<シンポジウム>

テーマ「公民館から地域の活力を」

コーディネーター 山本 恒夫 氏（八洲学園大学長）  
シンポジスト 藤井 孝行 氏（広島市三篠公民館長）  
葛原 郁子 氏（広島県立生涯学習センター生涯学習推進マネージャー）  
中村由利江 氏（ボランティアグループ「夢講座」代表）  
関 福生 氏（新居浜市教育委員会社会教育課長）

○山本 それでは始めさせていただきます。テーマが、まさにいま社会で一番求められる「地域の活力を」ということですが、そこを公民館で担っていきましょうということですね。地域の活力ということはいろいろ言われますけれども、実際にやる人たちはどこにいるんですかということになると、まさに「公民館から地域の活力を」ということになってくると思います。

今日は、ここに4人のシンポジストをお招きしております。こういうシンポジウムというのは大変便利です。いろいろお話を聞くとすると、それぞれ4人の所へ通わなくてはいけないのですが、いっぺんに集まってくださって、いろいろなお話が聞けますし、質問もできます。煮詰めることもできます。

ただ、普通はシンポジウムというと、3時間ぐらい取らないとなかなかうまくいかないのですが、今日は日程的なことがございますので、わずかな時間です。そこで相談をしたのですが、頭のシンポジウムの部分は、それぞれの方々からいろいろな提案をしていただくと。質問もしていただくなり、あるいは相互に意見を交換していただく。その議論を深めるところは、明日の分科会のほうに流れ込んで、そちらでやっていただくというようにしますと、時間が取れますから、これからいろいろな提案がなされると思います。それぞれそういうところで、また深めていただければ幸いです。

では早速ですけれども、紹介といっても自己紹介が一番いいわけですから、自己紹介をしていただこうと思います。いま、こんなことをやっていますというあたりのことを入れながら、まず藤井館長から自己紹介をお願いします。

○藤井 皆さん、こんにちは。財団法人広島市ひと・まちネットワーク、三篠公民館の藤井です。先ほど開会行事におきまして、優秀職員表彰をいただきました。本当にありがとうございます。

私は昭和46年に広島市の職員となりました。最初の職場は税金の賦課係でしたけれども、公民館の職員になりたいという希望を出しまして、昭和51年に中央公民館に配置されました。良かったなと思っております。それから、広島市内の公民館を7つほど、いろいろな地域を歩きました。その途中に教育委員会の社会教育課、区役所の地域振興課、福

社事務所と歩かせていただいて、行政の勉強もさせていただきました。今日、西区の都市部にあります三篠公民館に勤めております。

私は常々、公民館にたくさんの方が来てほしいと願っています。そういった努力で、職員には元気よくあいさつをしていただきたいと思いますと思っており、いまは実践しております。

三篠公民館では、3つの事業を重点的にしております。1つは地域の活性化事業。「かよこバス」というものを地域の活性化として支援事業をしております。2つ目は青少年の健全育成。特に中学生とのかかわりが公民館では薄いので、中学生に公民館へ来てもらいたいということで、その事業を行っております。3つ目は、私どもの地域課題、都市部はどこもあると思いますが、子育て支援事業に力を入れております。3つのことに力を入れて頑張っているところです。簡単ですが以上です。

○山本 ありがとうございます。それでは葛原マネージャーをお願いします。

○葛原 広島県立生涯学習センターの葛原と申します。よろしくお願いたします。

私は、この生涯学習センターに非常勤のかたちで勤務し始めて6年目です。その間に、県立生涯学習センターも、駅の近くにあった建物から、いまは県立の図書館などが一緒に複合施設の中に入って活動しております。

その中で公民館もそうだと思いますが、社会教育・生涯学習関連の職員の方たちが、もっと元気を持って、やりがいを持って力を付けていくという研修事業に特に取り組んでおりまして、私もそちらのほうを担当させてもらっています。それは県の主催のものもありますし、市や町主催の研修もありますけれども、その中で当然、公民館あるいは類似施設の職員の方たちと一緒に、公民館をどのように活性化していったらいいかというかたちで勉強をし合っているところで公民館とかかわり合っています。

もう一つは、県の公民館連合会という市や町の公民館全体の組織ですが、広島県では約3年をかけまして、公民館をどのようなかたちで、これから活性化していけばいいか、広島県全体の公民館のあり方といったものを検討する委員会をつくりまして、その委員長というかたちで皆さんと一緒に検討してまいりました。ある程度のかたちはつくりまして、ホームページがございますので、また見ていただければと思います。

その中で、やはり各市や町の公民館が大変な状況になっていて、課題や方向性をどのようにしていったらいいかというようなことを、関係者の方たちと一緒に考えてまいりました。そのようなところでも、公民館といろいろかかわらせていただいています。ですから、中・四国全体ではありませんが、広島県の市や町の公民館などの現状を知る機会を得て、今日はそのような立場からお話をさせていただけたらと思っております。よろしくお願いたします。

○山本 ありがとうございます。それでは、ボランティアグループ「夢講座」の中村代表です。

○中村 皆さん、こんにちは。「暑い中、本当によろ来んさったのう」。私は、たぶんこのお四方の中で、ひよっとしたら公民館に一つ欲しい気分転換剤のような立場かなと思って

おります。

今日は自分にとってはちょっと気取った格好です。最近、ほとんど私は「紙芝居夢屋のおっちゃん」で、中国5県あたりをぐるぐる回らせてもらっている紙芝居屋さんですが、それができたのも、やはり公民館から生まれ育った紙芝居屋さんということで、本当に母体に温かい人がたくさんにいたということが、私にとっては大きな支えでした。

その中で生まれたのが「夢講座」、いま17年です。もう一つは、子どもの情報誌から始まった、情報誌を作るグループ「ゆめなか@情報局」、これが13年、そして紙芝居さんが13年と、本当に年を取ってしまいました。十年取って、頭の中で数えてください、49歳です。

そういうことで、本当に皆さんに笑顔があふれる町になったらいいなと。それぞれの公民館で大変だと思いますけれども、笑顔のある町、そして「一人一人が輝く、真珠のような」というようなものを、その後でまた話をさせていただけたらいいと思います。

今日は「夢講座」からのささやかなごあいさつ代わりに、先着数百名だと思いますが、「えんぴつくん」というのを持ってまいりましたので、お帰りの際に、もし出口で見つけたら持って帰ってください。これはおみやげというか、ごあいさつの気持ちでございます。以上です。

**○山本** ありがとうございます。49歳で9を取ってしまえば40代。アラフォーではないですか。たいしたものですよ。それでは関課長、お願いします。

**○関** 私は愛媛県の新居浜市から参りました、社会教育課 関福生と申します。来年、愛媛のほうでこの大会が催されます。今日、このようにたくさんの方がここに集まっておられますから、ぜひ来年もこの熱気を愛媛にお持ちいただけたらと思っております。

私は昭和56年に市役所に入りました。その一番初めの職場が公民館でございました。その公民館に行った時に、初めは正直、カルチャーショックを受けたのを覚えております。それまでは同じ年の人間とばかり付き合っていたのが、公民館に行くと、年配の方といういろいろお話をしなければいけない。初めの1カ月、2カ月は、なかなか公民館での座り心地が悪かったことを、いま思い出します。

しかし、その時に初めに言われた言葉で、いまだに頭の隅というか、胸の奥にとどめているがございます。「おまえら役所の人間は、公民館に来て3年ほどおったら、また本庁に帰るんだろう。帰ったら、公民館のことなんか気にもせんのではないか」と、そういうふうな話をされました。あるいは「公民館に出入りをせん人間、数えてみると、役所の人間、学校の先生、警察官」、この中におられたら申し訳ないのですが、言われたのはそういうせりふでございました。

いま、公民館とのかかわり、いろいろ含めて私も30年ほどたちますが、その時のその方の言葉を自分の中でどうやって解決していくか。いまは仕事も少ないかもしれませんが、それが公民館と私の本当の意味でのこれからの課題であると、いまも考えております。

いま、公民館を取り巻く環境は、先ほどのお話にもありましたけれども、本当に厳しい状況があるのではないかと考えます。いま「公民館海援隊」という事業を文部科学省で行

っておりますが、私もそのメンバーの一人に加えていただいて、情報交換をしています。

特に東日本は公民館が本当に大変です。いま、はやり of 事業仕分けの中に公民館が取り上げられて、公民館を知らない人に30分ほどで公民館のことをジャッジされる。結論として、例えば公民館を廃止ということになれば、翌年から公民館はなくなってしまう。こういう状況は、やはりわれわれの力で何とか防いでいく、乗り切っていかなければいけないと思います。

そのためには、いま、どういう公民館が求められているのか。あるいはもっときつく言えば、将来、公民館というものは本当に必要なのか。われわれは日ごろの仕事に埋没することなく、そういったものを頭の隅では、いつも考えておかなければならないのではないかなと思っています。そういう論点から、この後、お話をさせていただけたらと思います。どうかよろしく願いいたします。

○山本 ありがとうございます。自己紹介をしていただきました。

面白いですね、簡単に自己紹介をと言ったら、自分の名前と所属などを言います。もうちょっと話してくれませんかと言うと、何を言うと思いますか。今日は3分間でとお願いをしました。そうすると、その人の経験を話すのです。ですから経験というのは、その人にとってかけがえのない財産です。その人の人格そのものなんです。そして今日集まって、いろいろな話を聞いたりしますね。そういうものを自分の経験のところに結び付けていくと、それは生きてくるんですね。

子どもは経験が不足していますから、しかたがなくというと変ですけども、教科書やバーチャルなもので勉強して知識などを増やしていきますが、やっぱり経験というのは非常に大事ですね。今日はそういうお話や提案がいろいろ聞けると思います。

それでは早速ですが、これから、まさに先ほどの地域の活力を公民館からつくっていくとすれば、どういうことが考えられるのかという提案に移っていきたいと思います。

まず館長さん、お願いします。

○藤井 先ほどの自己紹介の時に提案を言うのを忘れていました。提案は「地域の宝」。皆さんのエリアにはたくさん宝があると思います。文化財、美しい自然、地域の方が大事にしているもの、あるいは私たち人という人材の宝があると思います。こういった地域の宝を公民館が活用して事業を起すと、町が活性化するのはないかと思っております。

人材に焦点を当てます。私たち広島市では、平成6年にアジア競技大会がありまして、その時に「一館一国・地域の応援事業」を行いました。公民館の回りの地域の方が、すごくボランティア活動をしてくださって、大きな成果を生みました。その成果のおかげで、平成8年に「財団法人 広島市ひと・まちネットワーク」ができました。何と素晴らしい名前でしょう、ひととまちがネットワークをする。

そして、その財団ができた当初から、人材育成、ボランティア活動をしていこうという人づくり事業を行いました。その人づくりの事業名は「さわやかふれあい事業」でしたけれども、これは発想が良かったと思います。1年目は基礎編、2年目は応用編、3年目は活動編。3年目には、もう自主グループが立ち上がっているいろいろな活動をしていくという、3年計画で長期的にボランティアを育てていくという事業展開を行いました。

なかなか公民館では長期的に人を育てることは少ないと思うのですが、これも地域の各公民館が、いろんな団体・地域の人と協議をしながら、参画協働づくりで地域活動を見ながらやっていったという状況があります。そういった状況で、人材という宝ができ、その人材から子育て支援グループや、町の美化を進めるグループ、郷土芸能を受け継ぐグループなどができました。町に影響力、活性化するグループができて、それらの地域では輝かしい成果が上がっております。こういった人材の宝は、私たち公民館にとっては大切なものだと思っております。

さて、私はいま現在、三篠公民館に勤務しておりますけれども、三篠公民館の場合はちょっと視点が違って、人材育成というよりは、もうすでに人材があります。その人材である商店の人が、ある時にひょっと、明治38年に横川から可部まで14キロの所に、日本で初めての国産乗り合いバスがあったんだということを見つけて、これは面白い、何とか復元しようではないかということでやりました。

かよこバス事業費の2,200万円ぐらいを集めました。手作り「かよこバス」の費用は700万円ぐらいだったのですが、これも公民館が3年計画で培ったのではなく、会議や行事をすることによって公民館職員が育てられたり、あるいはそれをやる人それぞれが輝いたりというように、自然と人材が宝になっていった。そして、また「かよこバス」が輝いた物の宝となりました。

こういった人材の宝や物の宝を公民館は発掘して、住民とともに協働で、長期的な目で育てていくことが、町の活性化にも、公民館から活力が生まれていくきっかけづくりにもなるのではないかと思います。それが公民館の存在を、地域での存在を上げていくと思っております。以上です。

○山本 ありがとうございます。それでは、先に4人の方からいろいろな提案を聞いてしまいたいと思いますので、葛原マネージャーをお願いします。

○葛原 いまの館長さんは具体的なお話をされたんですけれども、私のほうは、ちょっと抽象的な話になると思います。

広島県という限定された中ではありますけれども、いろいろな地域に出向いて、6年間毎年各市町を回って見た経験ですが、関課長さんも先ほど言われましたが、いま公民館は、やはり非常にその存在意義自体を問われていると思います。貴重な公金を使って、どうしても存続しなければならないものなのかどうかということを、すごく問われているとひしひしと感じています。ここをきちんと説明していかなければ、公民館にかかわる者が説明責任を果たしていかなければ、なかなか公民館の存続は難しいと思っております。それを、いま考えていかなければならないと思います。

その中で一つ、公民館はこれまで個人個人の自己実現の場、豊かな生活をつくっていくというところで、非常に貢献をしてきたと思うのですが、やはり今日のテーマでもありませんけれども、自己実現の場から「住民力」、市民力とも言えるかもしれませんが、そういうものを培う場へ転換をしていかなければ存続していかないと思っております。

では、「住民力」とはどのようなものかですが、私は次の3つで「住民力」を考えることができると思います。1つは地域にさまざまな課題が存在するわけですが、それを課

題として発見して解決する力ですね。いつとき「ご近所の底力」というようなことを言われましたが、それが1つ目です。

それから2つ目は、いま地域の中で人と人とのきずなや信頼感がなかなか見えなくなっていて、「人間関係資本」と最近は言われていますが、資本というものは目に見える物だけではなく、目に見えない人のきずなといったようなものが地域の非常に大切な資本なんだということが、なくなってみて、あらためて強調されています。英語で「ソーシャルキャピタル (social capital)」と言われていて、これは日本だけの問題ではないととらえられています。そういう「人間関係資本」という地域のある一つの宝ですが、それを紡ぐ力が2つ目です。

3つ目は、人々の地域の中での居場所、お互いに世話をし合う場がなかなか見えなくなってきました。そういう地域の居場所をどうやってもう一度つくり直していくのかということなのです。

もう一度言いますと、1つ目が地域課題を解決する力、2つ目が人間関係資本を紡ぐ力、3つ目がケアの居場所を再構築する力。私はこの3つを「住民力」ととらえていますが、それを公民館は学びの活動を媒介として、これらの力を培う場になっていくことが非常に重要なのではないかと考えています。

いまの地域社会、社会全体もですけれども、個人と社会というような両極端なものは見えますが、その間をつなぐような中間組織、従来は地域の中にあつたような組織が、非常に弱体化している。その中で、そういう中間的な組織は、いまの可能性として何があるのか。

皆さん方の公民館活動の中でも、いろいろと趣味的なグループや同好会のようなグループがあると思います。それも自己実現の場ではあつたのですが、もう一度、先ほど言いました「住民力」、人間関係をつないだり、居場所にするような場にしていくように事業をとらえ直すことが必要になってくると思います。それをどうやるとらえ直して、公民館活動としていくかということところが職員の力量になってきます。

私たちは、職員が講座を企画して、学習機会を提供して人を集めるというようなことが公民館事業と思いがちですけれども、やはりそうではなくて、住民自身が自発的に行う活動が非常に重要なので、いまあるものをどうやって「住民力」につなげていくかということ、公民館職員の力量として問われていると思います。

そういう中で一つ、各市町だけでは、なかなか公民館の職員の力量は培われていかないので、もう少し幅広い県全体とした、例えば、県公連のようなものとか幅広いネットワークで、部局は違っても、施設の名称は違っても、公民館のような学習・学び活動をするような所がつながって、みんなで力を付けていく場をもう一つつくっていくというのが、非常に重要ではないかなと思っています。以上です。

○山本 はい、ありがとうございます。予定でいくと、この後、中村代表ですが、申し訳ないのですが飛ばして、中村さんには最後に話していただくことにします。いまは広島の話ですね。四国のほうはどうなのかということもあるので、関課長に先に話してもらいましょうか。

○関 四国と特に限定すると、なかなか申しにくいのかもしれないのですが、四国はどちらかという昔の公民館のイメージ、特に私は愛媛ですけれども、愛媛はまだまだ昔の古き良き時代の公民館です。終戦後、公民館が何のためにできたか、地域を興す喜びを共に感じる施設という意味合いで、まだ公民館が頑張っている地域ではないかなと思っております。しかし、それは同時にいろいろ、これから先の課題もはらんでいる部分もあるのではないかと、正直、思います。

昔、出来たての公民館は、場合によれば建物もない青空公民館であったかと思えます。そういう所に人が集まって、自分たちの地域をどうやっていい地域にしていけるか、そのことを共に語り合っ、そこで自分たちにできること、なすべきことを行っていった場所、それが公民館であったかと思えます。

しかし、平成に入って生涯学習の時代を迎え、どちらかという施設も整ってきて、エアコンが付いた快適な環境の中で、いま公民館が、ともすれば顧客優先主義といいますか、いかにたくさんの人に利用してもらうか。利用した人の数が公民館の評価につながるような状況に、いま流れつつあるのかなと時々感じる場合がございます。

一つ、そういったものを、これから先、打ち破る手だてというのは、先ほど葛原さんが言っておられた、公民館がいかに地域を変えていくか、地域の課題を発見して、それを自分たちで議論して、どうやって地域が変えられるかを実践につなげていく。本当の意味での知行合一の考え方の下に、公民館が進んでいくべきではないかという思いは持っております。

地域課題という、行政ではそれぞれの担当課がございます。環境であったり、福祉であったり、あるいは自主防災であったり、それぞれ行政の担当課がありますから、その仕事であると。公民館はともすると、そこから一步距離を置いてしまう。ポスターを掲示してくれぐらいであれば協力もするけれども、一緒に出前講座を展開するとか、地域の人を集めて、いま、こういう問題があるから、みんなで解決しようとするところまで食い込んでいくというのは、なかなか少ない状況にあるのかなとは思っています。

公民館は、地域との一番のつながりがあるというプライドを、もっと前面に出して、公民館の長所を売っていったらえればいいのではないかなというのが、1点目に思うことでございます。

あと2点ほど。一つは公民館が大人、特に高齢者あるいは働いていない女性を対象にしての施設になりすぎているのではないかという気がいたします。どこが抜けているかというと、やはり子どもですね。子どもとのかかわりが、まだまだ公民館では少ないのではないかなと思います。放課後、学校からの帰りに公民館に寄ると怒られるところが、たぶん多いかもしれませんけれども、そういった場が公民館にあれば、子どもは立ち寄ってくれると思います。

子どもと関係を結ぶことは、未来に対して種をまくということではないかなと私は思っています。必ず10年、20年先に花が咲くかどうかは分かりません。しかし、いま子どもに対して何もやっていなければ、20年、30年たって実を結ぶことは決してないと思います。小さい時に公民館に行ってこういうことをした、公民館の活動でこういう体験をした。それはきっと子どもの胸の中に残っていくのではないかと思います。

いま、学校支援地域本部事業であったり、放課後子ども教室授業であったり、いろいろ

な活動が展開されています。確かに予算の確保は来年度どうなるか分かりませんが、しかし公民館はそういったものを、自分たちの子どもとのかかわりとして、きちんと受け止めていっていただければと考えています。

子どもは、5年、10年のうちに本当に成長します。われわれは学校の先生ではないので、小学校1年から6年まで付き合う機会はなかなかありませんが、おそらく6年もあれば、子どもは別人に育ってくれると思います。そういうかかわりを地域の中に持ち合わせている地域は、本当に将来が楽しみな地域ではないかというのが2点目でございます。

あともう1点だけ、公民館の組織についてでございます。公民館は、いままで公民館運営審議会にいろいろ意見を求めて、あるいは団体との協力の下で、いろいろな事業を進めてまいりました。しかし、これから先、先ほど言いました地域課題解決型の公民館を目指すときに、いままでいろいろとご意見を伺う意味合いの強かった公運審のかかわりだけで、果たして地域づくりができるかどうかという、なかなかしんどいところがあるのではないかと、正直、思います。

これは私どもの市だけかもしれません。公民館運営審議会という組織は、昭和30年代ぐらいから同じような構成団体で、本市の場合は15名の定数の中で組織を動かしています。したがって、昔から同じ顔ぶれが、ずっとメンバーとして続きます。新しいことをしようとしたときに、果たして、その人の意見だけで新しいことが起こっていくかどうか。このごろ、そこに悩みを抱えているのが正直なところでございます。新しい事業を起こすために、新しい人が公民館活動の中に入ってこられるような仕掛けが、いまから先、非常に大事ではないかと思っております。

以上3点、取りあえず提案させていただければと思います。

○山本 ありがとうございます。それでは最後に中村代表、お願いします。

○中村 私は、もう亡くなったんですけども、私のお父ちゃんがいつも「人間、星の下には皆平等やで」という感じで育った人間ですので、みんな一緒だなと思って大きくなりました。そして本当に偶然ですけども、公民館というところに出会って、公民館で活動が始まりました。それが「夢講座」で、17年前のことです。

たまたまそこで出会った館長さんはじめ、職員の皆さんは温かい人ばかりで、人間というのはその場で自己判断しますので、こういうところはみんな温かい人だなと思って素直に受け入れて、みんな一緒に平等やで、というお父ちゃんの気持ちで進んでいくと、みんな同じような感覚というか、三角がいつも倒したままの状態です。公民館の職員さんも活動の皆さんもみんな同じという感じで、時々飲み会もあったりします。

そういう中で育って、偶然、公民館のイベントの時に「昔、紙芝居をしとったね。誰がする？」と言ったら、こんな性格の人間ですから「あんたしかおらへん」という感じで、「紙芝居のおっちゃん」が公民館から誕生しました。お客さまは本当に喜んでくださるし、お客さまの対象が赤ちゃんから高齢者まで。ということは、いろんなジャンルの学びができるのは、たぶん私は公民館かなと本当に思っていて、そこで「朗読の会」も生まれて発声などを学ばせてもらったり、「これからはパソコンの時代だから、由利江さん、ワープロを取り上げ」と職員さんが強引に取り上げて、泣き泣きパソコンをやったり。



いま、この会場は平和公園の中にありますけれども、毎年、8月6日は「サダコさんの紙芝居」を一日中ここでやっています。外国のお客さまも来られて、意味が分からないという感じでしたので、地域の人に英訳をしていただいて、泣き泣き覚えて、やっと今年の8月6日は、いろいろな国の方は母国語、私は日本語で共通語が英語なのですが、涙を流してくださったというのが今年の強い印象でした。それは、やはりずっと公民館で学ぶという学びと実践のスパイラルで、それがだんだん深まっていく唯一の場所ではないかと、私はいつも思っております。

いま、先生方も皆さんもいろいろな危機感をお持ちでいらっしゃるの、確かに私も紙芝居をして回って、中国5県、四国にはなかなかお邪魔できませんが、実際に感じております。でも、職員さんが一人で頑張っている姿を見ると、エールを送りたくなるような気持ちでいますので、今日、会場にお越しの公民館の職員の方、どうぞ夢をあきらめずに頑張ってくださいというの、それが「紙芝居夢屋のおっちゃん」です。

そして紙芝居は紙芝居だけではなくて、そこはやはり学びと実践ですので、赤ちゃんは赤ちゃんなりに、高齢者は高齢者なりに、平和学習や人権学習など自分が勉強をしなくていけないので、またいろいろな方に出会って教を請うてやっております。それが紙芝居のほうでございます。

「夢講座」は折り紙が主となりまして、40代から60代、20年近く付き合いました。徒歩圏内に活動者がそろっておりますので、これから、おそらく人生の終焉（しゅうえん）を迎えるまで、この仲間とはいろんなことを語り合いながら、話し合いながら進めていくと思っております。

この9月10日には、県北の小学校ですが、全校児童13名、地域の高齢者は120名という、本当に少子高齢化のかたちになっている所に、われわれはプレゼントづくりの指導に行きます。たまさか運転ができるメリットもありましたので。運転ができて移動ができる。

でも、だんだん年を取ってくると、やはり地域に戻っていくと思っております。その時に、ここで何か集える場所があると、すごくすてきなと思っております。おそらく、これからは公民館とかコミュニティーセンターとか、いろんな名称が起こってくると思っておりますが、うちのお父ちゃんが言ったように、「人間、星の下、皆平等やで」というのと同じように、理念とか感情とか基本的なものは変わっていかないと思っております。

私が、いま「夢講座」の仲間と公民館をお借りしてやっておりますのが、「ちょっとよりみちの駅・赤ちょうちん版」。公民館さんのご協力も多大にございまして、いま3年目ですけれども、やってみて感じたのが、集団になじめない子育て中の若いママ、その方たちが来て、おばちゃんたちと会話をしながら、無表情だった顔に生気が戻り、子どもに対しても、だっこしたりあやしたりが上手になったりして、地域の子育て支援センターの集会に行ってください。

やはり人生には、表に華々しくあるかたちもありますけれども、ひだの部分がいっぱいあると思っております。心の病を抱えている青年とか、集団になじめない子どもたちとか、そういうところを私自身は、紙芝居プラス忍者遊びか何かをして、元気で笑顔になっていただくことをモットーにやっております。

組織的なことなど、これからの行政的なことは、いろんな方に教えていただきながら、

地域活動者としては自分のできる範囲で頑張っけてやっけていっきたいと思っけているところだす。以上だす。

○山本 ありがとうございませだす。いま、お聞きして、私のほうから一つ、4人の方に問題を投げかけて聞いてみたいと思っけていることがございませだす。

まず、館長さんとマネージャーに聞きたいのだすけど、館長さんは人材が宝というお話、マネージャーは公民館の存在理由がなければ公民館はつぶれるというお話がありました。確かにそうだと思っけています。

ところが、そのお話の中で葛原マネージャーのほうから、これから先の公民館の役割として「住民力」がでてきました。そうすると、「人材の宝」というのと「住民力」は重なっけていると思っけていますね。

私はよく申し上げるのだすけど、こういう話は中身のない話が多いんです。例えていうと、タマネギ型かタケノコ型かというのだすけど、タマネギはむいていくと最後は中身が何もなくなっけてしまう。かたちはありますから、生涯学習だとか何とかいいませだすけど、では何だすかと聞いていくと中身がないんです。タケノコは皮をむくとタケノコがでてくる。

だすから、そのタケノコがでてくる部分がいまの話かなと思っけてるので、お二人に突き合っけてお聞きしたいのだすけど、館長さんのほうは、これから先、人材をみんなで見つけて育てていくことが大事だとお話になりました。その人材に関して、葛原マネージャーは、繰り返させませんが3つの力のことを言っけてくれています。「住民力」というような言葉で言っけておられませだす。そういうものが中身として、タケノコがあるのかないのか。もし、重なっけてるところがある、さらにははみ出すところ、付け加えるところもあるという場合もあると思っけてるので、そのあたり、館長さんはどうだすか。葛原さんの「住民力」を聞いて、何かご感想があれば。

○藤井 職員の方にもそれなりに、公民館の職員としてどうあるべきかということで研修したりして、職員の力を付けていっけてるわけだすけど、その力が、現実には住民の方と話していたら、住民のほうの方が優れてるということが多々あるわけだす。そういうときは、やはり職員として住民の方の力を指導していただいけて、指導というより協調しながら住民力をつくっけていくと。

そして公民館の職員が、すべてオールマイティーにはできませんので、地域の方が学習をしていただいけてきっかけづくりをして、コーディネーターの役割もありますので、住民のどこに素晴らしい人がいらっしてやるかという職員の情報能力も大切だと思っけています。そういう情報能力で職員と住民とが話し合っけて、「住民力」がどこにあるのかというのを職員が住民と一緒になっけて求め行動していくと、公民館がさらに活発になっけていく。

どこに町の課題があるかということをして、うまくさがしていく。その住民と公民館、行政のほうは公民館だけでなしに、市庁部局や町部局にもいろんな人がいらっしてやるし、民間の人にもいろんな知恵袋の人がいますので、そういう方を、いかに職員がネットワークを張っけて見つけていくか。課題を解決していき「住民力」を引き上げていくという公民館職員の働きがあると思っけています。

○山本 ありがとうございます。マネージャーはどうですか。公民館に対して期待するもの、先ほどのような「住民力」を培っていくときに期待するものは、率直なところで話をいただくとありがたいです。

○葛原 私は具体的に、これは生涯学習センターの職員という立場ではないですけども、広島市民として活動した経験をお話しさせていただきたいと思います。

広島公民館は、どこもいま非常にいろいろとかたちが変わってきています。その危機感を持ったときに、やはり何とか、これは公民館の関係者だけではなくて、ほかの人たちも一緒に自分たちの公民館をどうしたらいいんだろと考えるような、そういう場を住民参画でつくらなければいけないと思って、「夢の公民館づくりプロジェクト」を始めました。これは行政の方たちのまちづくりの補助金をもらって、公民館職員、住民や、いろんな方たちに呼びかけてつくりました。

その中で、先ほど関課長さんからもありましたが、もちろんこれまでの公運審自体、公民館にとっては住民の意見を反映するという点で、重要な組織、フォーマルな組織ではあるのですが、もっと別の参画ルート、住民が参画するようなルート、組織も持たなければならぬ。それで、公民館応援団のようなもの、これまであまり公民館とかかわっていないような、いろいろな地域の方たちに呼びかけて、公民館長さん、公運審の会長さん、地域の住民の方たち、みんなでそういうものをワークショップをしながらつくっていくと。

その中で、これまで公民館に来なかったような人たちも公民館に来てくださって、公民館がある種の居場所になっていくようなものをしようということで、公民館のホールがありますね。ホールのような所で、いろんな地域の活動を紹介したり、地域の趣味的なグループや同好会はどうしても閉ざされるのですが、それを皆さんに知ってもらうような公開の体験学習会をしたりしました。また、最近の町は縁側がないので、公民館が縁側になるということで、カフェですね。そこでお茶や、地域の有名なお水があったりすると、そのお水を持ってきてもらって飲んだり、そのような新たなもう一つ別の活動を地域の中で作り出す。そうすると、いろんな地域の課題とか、これまで紡げなかった人間関係とか、また別の居場所ができるんですね。

公民館というのは、これまで何か学ぶ、あるいは講座に参加するという目的がなければ来られなかった場所だったのですが、そうではなくて、先ほど中村さんからの「ちょっと寄り道、赤ちょうちん」ではないですが、やはりそういう場にどうやってしていくかという点。先ほど藤井館長さんは「協働」と言いましたけれども、ある種の人をつなぐような組織づくりを、公民館の職員、公運審の人たち、あるいはそこにはいなかったけれども、地域のリーダーのような人たちが一緒にやっていくという動きは出てきています。

そういうものが機能していけば、私が先ほど言いましたような3つの力が付いていくような場に、公民館はなるのではないかと。私は、これは実際に自分の体験でそういうことを経験して、そういうことができれば、存在意義は十分担保できるのではないかなと思っています。

○山本 なるほど。男は居場所がないんですね。本当によくする話ですが、私どもの大学の理科系の先生が、「男の居場所づくりという講義を出してもいいですかね」と聞かれた

ことがあるんです。「いいですよ」と言ったんですが、仲間だけでそういう構想を立てたところで、定年になって終わってしまいました。しかし、確かに居場所はすごく大事ですよ  
ね。

中村さん、いまのお二人の話を聞いていて、先ほど中村代表は、「人生のひだ」とか「心のひだ」、あるいは「人間のひだ」ということを言いましたね。そういう点から見て、公民館の方々あるいは公民館にかかわる人たちが、こういうところをこんなふうに、もうちょっと見てくれると、もっと地域の人たちが行きやすいとか、あるいはもっと協力できるとか、いろいろ出てくると思うのですが、その「ひだ」の話を少ししてもらえませんか。

○中村 そうですね。本当に自分の人生と重ねる部分がずいぶんありまして。正直に申しますと、いま59歳ですけども、3分の1が公民館とかかわってしまって、これほど公民館を利用しなければ損、損という女はいないかなと思うんですけども、やはりやってみて、こうしたい、ああしたいではなくて、生きてみて、ああ、これが必要なんだな、あれが必要なんだなという都度に、公民館さん側と相談しながらきました。

それから、自分の人生の中にもいろいろな心の問題を抱えている青少年とか、大人の方も含めて、ずいぶんと苦しい人生を送っていらっしゃる方がたくさんいらっしゃることも事実です。そういう方たちが、先ほど山本先生がへこみを復活するというので、そのへこみをいかに復活するかというのは、本当に具体的にはどうすればいいのだろうかとなると、やはりフェース・トゥ・フェース (face to face) というか、言葉と言葉で交わし合い、心と心を交流させる場所がどうしてもいるのではないかと。そうすると、もうすでに現状にあるというのは、こういう公的な場所ではないかと。

それを行政の方も公民館の皆さまも、実は数は少ないんですね、100人、200人というようなものではなくて。でも、その方たちがお元気になられたら、ずいぶんと効果はあるし、本当に心が寂しくなって事件をたくさん起こしているニュースを聞いたときに、どこかで誰かがかかわってあげたらいいのではないかとというのが、いまの私の切実な気持ちです。

お元気な方は自分で道を切り開いていけるんですけども、そうでない方は、ちょっと寄り添うというか、そういう方がどうしてもいるのではないかと思います。今日は本当に大勢の方がいらっしゃって、この方のお友達が何人かいらっしゃったら、それだけの人数が、そういう方たちと少しでもかかわり合うといいのではないかなと。

だから、そういう場所に一つの方法として利用させていただいたら、すごくありがたいなど。これは本当に見えない部分、非常に繊細な部分なので、微に入り細に入り心してやらなくてはいけない。でも、学びの場でもあるし、活動の場でもあるので、そういう意味では、こういう場所というのは私個人にとってはありがたいなと思っております。

○山本 ありがとうございます。いま「見えないところ」とありましたが、学校教育のほうでも、「隠れたカリキュラム」という言葉がはやりましたね。いまでも定着していると思います。ヒドゥン・カリキュラム (hidden curriculum) という見えないところで、そういうことが非常に大きな力を持っているということがありますから、隠れた公民館というのは非常に大事だと思うんですね。

さて、行政はそれを支援する立場にあると思います。いまの「見えないところ」まで含めて、先ほど関課長が3つの観点を提案してくださいました。これからは、こういうことが必要なのではないかと。特に新しい人が入ってくる仕組みが必要なのではないかという提案をしてくださっています。

行政の立場から見ると、いまの話はどう思いますか。感想をお願いしたいと思います。

**○関** やはり公民館に行くとか何かほっとするという場所、それがいままで公民館が育ててきた公民館の強みではないかと私も考えております。

たぶん、いままで皆さん方がいろいろなかたちで、公民館でいろいろな事業をしてきたと思います。おそらくは、いろんな事業を企画しても、なかなか自分の企画どおりに人が集まってこない、あるいは反対する人がいる、そんな経験をいままで積み重ねてきたのではないかと思います。

たぶん、そういう中で公民館は、もうあっさり白と黒と結論を出すような人とかかわり方をせずに、グレーと言うと言葉は悪いですけども、ほんわりとした柔らかい色で地域の人たちとかかわるような、公民館独自の人間関係のつくり方を身に付けてきておられるのではないかと考えています。それは本当にいろんな面で、先ほど言われた「心のひだ」を感じるような事業を展開していくことが、公民館であれば可能ではないかと思います。

一番あっさりと思うのは、やはり子どもとの関係です。いまの子どもはいろいろな環境に置かれて、非常にストレスを抱えた子どももたくさんいます。そういう子どもが公民館に来て、公民館に来ているおばちゃんやおじちゃんといろいろな話をする中で、子どもの顔が変わっていく場面に何度も接しました。そういう温かい柔らかい人間関係が、これからの公民館の存在意義になるのではないかと思います。これは感想で申し訳ございません。

**○山本** ありがとうございます。いまのお話で、ほかに4人の方々、何か補足がございませうか。ありましたら、どうぞ。

**○藤井** 先ほどの「住民力」を引き上げることがありますけれども、公民館はいろんな事業があります。その一つ一つを丁寧にやっていると、「住民力」が少しでも引き上がっていくのではないかと考えております。

事業も、学習会だけではなく、イベントもありますし展示もあります。公民館の『公民館だより』という広報誌もあります。他の民間団体・地域団体が行事をするものを『公民館だより』に載せて地域の人が知っていく、良いことを知っていくといったことで、住民力が伸びていくのではないかと考えております。以上です。

**○山本** ほかの方々、いかがですか。何か、先ほど言い忘れたこともあれば、いま補足していただいていると思いますが、大丈夫ですか。

それでは、いまのお話、それぞれの観点・立場から言ってくださっていますけれども、共通して出てきているのは、やはり力を付けていこうということだと思います。でも、その力が、何かポキポキしたものでは駄目だよという話です。

私は前半に時間をいただいたのでお話ししましたが、やはり「成長性弾力」ですね。その

「成長性弾力」を先ほどは職業人のところでお話をしましたけれども、いまの話聞いたから、そこをそっくりいただいて、職業人ではなくて「V字型人間」というので、レジリエンス (resilience) とは何だと言ったら、いま出てきた話の「力」のところを入れれば、そのまま地域で使えますよね。これからは、そういうところで地域の人たちに力を付けていってもらうんだ、「成長性弾力」を培ってもらうんだということにしていけば、これから先の地域を活性化する決定的な重要なポイント、観点になっていくような気がします。

そんなところは、皆さん方が明日の分科会でもいろいろ議論をなさると思いますから、そちらのほうに委ねるとしまして、これから時間もあまりありませんので、最後にこれだけは言っておきたいという一言を、4人の方から出していただければと思います。それでは、今度は関課長のほうから何かあれば。

○関 やはりいままで公民館は自分の地域、自分の施設だけを、ある程度、見てきたのではないかなと、そんな感じを持っています。広いところに視線を転じてみるのも大事なことでないかと思えます。同じ市内でも、ほかの公民館に目を転じると、いろいろな事業をやっています。うちの地域とは違うから、その地域のことはまねができないということは決してありません。

もっと広く、先ほどの葛原さんのお話にもあったように、広島県では県内でいろいろな学習が行われているようでございます。先ほどちょっと触れたのですが、「公民館海援隊」という事業では、日本全国の公民館がいろいろな情報交換を行っております。そのように、ほかの所からいろいろないい知恵を拝借する、まねる。もともと「学びはまねび」という言葉も聞きますけれども、人のいいところを盗んでくる。それが地域そのものの力を上げていくことにつながるのではないかと私は思います。

まねるといって、何か悪いイメージが結構ありますけれども、人に教をを請うということは非常に素晴らしいことではないかなと思えます。自分が一からすべてを考え出して、一つの事業を企画・立案するということは、よほどのスーパーマンでないとなかなかできません。いろいろな所にある資源をいかに有効に活用していくか、それが非常に大切なことではないかと思えます。

あと1点だけ、やはり公民館の活動というのは、その地域の人に支えられてなんぼのものではないかと思えます。いままで公民館活動は、どちらかというと、将来どういうところに自分たちがたどり着きたいか、10年後、20年後、こんな町を自分たちはつくっていききたいんだという目標設定がなかなかなかったような気がして、私は自分にいつも反省を求めています。

富士山に登るのか、エベレストに登るのか、あるいは隣近所の小山に登るのか。そのことを決めなければ、公民館活動はどんなことをやっていったらいいかということが、なかなか見えてこないと思えます。みんなでいろんな議論を重ねて、このごろはワークショップという手法もはやっています。そういう中で、自分が言ったことに一人一人が責任を持つような熟議の場をつくって、そこで決めたことをみんなが力を合わせてやっていく。

どちらかというと、人に何かをやってくれというような活動に流れるのではなく、そこに住んでいる一人一人の住民が、自分の町のために、私はこんなことができる、ここまでだったらできるというものを持ち寄って、何か地域のためにやっつけていこうではないかとい

う思いがまとまる場所、それが公民館ではないかという印象を、このごろは持っております。どうもありがとうございます。

○山本 それでは、中村代表。

○中村 私は、やはり人生を笑顔で終わりたいなと思っております。皆さまも、おそらく地域に戻られて、その笑顔で地域が温かくなると思いますので、どうかなるべくたくさんの笑顔を出していただければと思っております。

1本の鉛筆、本当に数百本しかお外の出口にはないと思いますけれども、これは美空ひばりさんの『1本の鉛筆』からいただいて、平和公園で活動したり、あちこちでやっております。「1本の鉛筆があれば 私はあなたへの愛を書く」というような歌ですけれども、最後は「1本の鉛筆があれば 人間の命と私は書く」。

子どもは言葉をたくさん知りません。まだうまく表現できません。でも、この鉛筆に祈りを込めて、私たちは「あんな大人になってみたいな」という大人でありたいと思います。そのためには元気でいなくてははいけません。今日、私は気分転換剤でございますので、応援隊のつもりで、皆さんご存じの『水戸黄門』の主題歌でございます『ああ、人生に涙あり』の3番、「人生 涙と笑顔あり そんなに悪くはないもんだ 何にもしないで生きるより 何かを求めて生きようよ」に音符を付けて歌わせていただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

(中村代表、『ああ、人生に涙あり』3番)

どうぞお元気で、ありがとうございました。

○山本 素晴らしい歌をありがとうございます。だいぶ前に一度、私は中村さんの歌を聞いたことがあります。一段と磨きがかかりましたね。驚きました。

それでは、葛原マネージャー。

○葛原 もうこれで終わってしまったほうが、みんな明るく終われるようではございますけれども、すみません。私は、また厳しいことを言うようですが。

今日の山本先生のご説明の中にもありましたような、今後の生涯学習などの方向性を示す中教審の答申の中にも強調されているんですが、これからの時代は個人の自立、あるいは地域社会の自立が非常に求められる時代になってくると。これはもう避けて通れない。ただ私は、公民館活動の方向性は、自立といっても「関係的自立」が大切ではないかと思っております。これは社会学者が言っていて、私の言葉ではないのですが。

それは、自立といっても孤立ではなくて、いろんな人やいろんなものや情報、それぞれ支援される中で、自分の生活や自分の地域の事柄に関して、自分で自己決定をして、そして参画して、自分の生活や地域をつくっていくという自立の方向性ですね。そういう自立の方向性を社会の中でどう培っていくかというのは、いろいろ研究もされています。

全然別の『都市社会学』という、地域をどうつくっていくかという本の中で、いま第3

の場所がまちづくりで非常に大切だと言われています。それはどういうことかということ、私たちが生きていくうえで、どうしても必要な第1の場所は家ですね。本当にプライベートで、そういう人間関係の場所。それから2つ目は、私たちが社会的に活動する職場、子どもたちは学校というような場所。そして、それだけではなくてもう一つ、その中間の第3の場所。強制されないのですが、個人だけではなく、私たちの身内だけではなくて、いろんな他者とかかわり合える場所が、いま最も必要だということが議論されています。

それを考えて、私はふっと思いました。私たちはそれを持っているのではないかと。日本というか私たちは、それこそ公民館がその可能性を持っているのではないかと。そこでは公民館というようなことは出てきませんでした、思いました。

そういう場所があれば、先ほど中村さんが言われましたように、いま高齢者や子どもの悲惨な事件がありますが、その人たちがそうならないような、ある意味予防的な、セーフティネットと言えるかもしれないのですが、ちょっとそこに立ち寄れば、もしかしたらそっちに行かなくてもいいような人たちが集える第3の居場所として、公民館は非常に重要な場所になる。それがきちんと説明できれば、どうしても地域の中に必要な場所になっていくのではないかなと思っています。私も、いろいろな人たちに、そののころをもう少しうまく説明できるようになっていきたいと思っていますので、皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

○山本 ありがとうございます。それでは、館長さん。

○藤井 公民館は、以前にも公民館という名前はありましたが、昭和24年に「社会教育法」ができて正式に認知されました。この公民館という名前は素晴らしいと思いませんか。公と民が一緒の館ですよという意味合いですね。公民というのは平等に見る人をつくっていく。つくるというと、ちょっと表現が適切であるかどうかわかりませんが、平等に見る力を養っていく、または人のために尽くしていく、人のためにやっという人を集めていく。育てるといってまた適切であるかどうかわかりませんが。そういう気持ちを含んだ素晴らしい公民館という名前があります。いろいろと新しい名前にしてはどうかと現代的な人が言いますが、私自身は、この公民館は素晴らしい名前だと思っています。

本日、公民館職員はやる気を持って、住民を温かくお迎えして、気持ちよく施設を利用していただくような、皆さんもそうだと思いますが、これからもやっていきたいと思っています。事業も住民と協働して事業展開をしていく。

本日、見ましたら、何人か地域の人にも来ていただいて、私は住民の方に好かれているなど少し思ったのですけれども、住民とのきずなを大切にしていくことが大切だと思っています。これからも公民館が生涯学習、まちづくり、自己実現の場となるよう、一生懸命に頑張っていきたいと思っています。以上です。

○山本 ありがとうございます。

いま「社会教育法」の話が出てきましたけれども、昭和24年に作られた「社会教育法」を起草した方をご存じですか、広島県出身の井内慶次郎元文部次官です。私ともう一人、



私の弟子ですけれども、どういうわけか年中引っ張り出されて、いろんなことを聞かせていただきました。「おれの話は古いよ」と。「干しシイタケとかかんぴょうのようなもんだ。だけど、それをその時の水に漬けてみる。その時に何があったのか、どういうことがあったのか。それが参考になるんだ」と。

経験というのは蓄積できないんですね。人間の遺伝子の中に経験は入らないんです。ですから、学習するしかないのです。それから、経験をまねしてと先ほどありましたけれども、学んで、そういう中から何かを酌み取っていくしかありません。

さて、それでいよいよ時間となりまして、ちょうどいいところ、これからそれではというので皆さんから意見が出たりするところだと思います。これをそのまま明日まで、今夜もあると思いますけれども、つないでいただいて、皆さんの中で少し熟成させていただいて、明日の分科会の中で、それぞれの課題に即して、いろいろとご検討をいただければと思います。

今日のお話を聞いていて、いろいろとヒントになるところ、目から鱗といろいろあったと思います。そういう中で一つだけ申し上げておきますと、皆さんが共通して言っていることは、公民館と地域住民の方々とその他いろんなところ、ボランティアの団体などとの関係をしっかりつくってやっていきましょう。葛原さんのように、個人と社会の中間というようなところも言ってくださっています。これはすごく大事なことです。

関係というのは見えません。先ほども見えないと言っておられました。どうして見えないのかといっても、見えないものは見えないんですね。あまり注目されていないんです。なぜ注目されなかったかという、アリストテレスがいけなかったらしいです。最初、ギリシャ時代に見えないものですから、実体というのは、目に見えるもの、これが第一だと。関係は第二だと言ってしまったものですから、関係のところあまり目が向かなくなってしまうんですね。

しかし、いまは関係が大事だとすると、今日のお話のように人材が大事、地域のいろんな力が大事だということを見ていくとき、関係というところに目を向けていけば、いろいろといままで気が付かなかったところに気が付くかもしれないと思います。

今日は暑い日です。しかし、いずれまた寒くなって、来年、早春にはタケノコが出てきます。ですから、タケノコ型公民館、中身のある公民館にしていくにはどうしたらいいのかというようなところを、いまのような話の中からご検討いただいて、来年の早春には、わが公民館はタケノコ型公民館であると胸を張って言えるように、いろいろご検討いただければ幸いです。

今日はこのぐらいのところで、いったん閉めたいと思います。皆さんのほうから質問があることは重々分かっておりますが、明日それをぶつけていただきたいと思います。

では、これでシンポジウムを終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(シンポジウム終了)

日時：9月2日（木）15:05～16:35

場所：広島国際会議場（フェニックスホール）